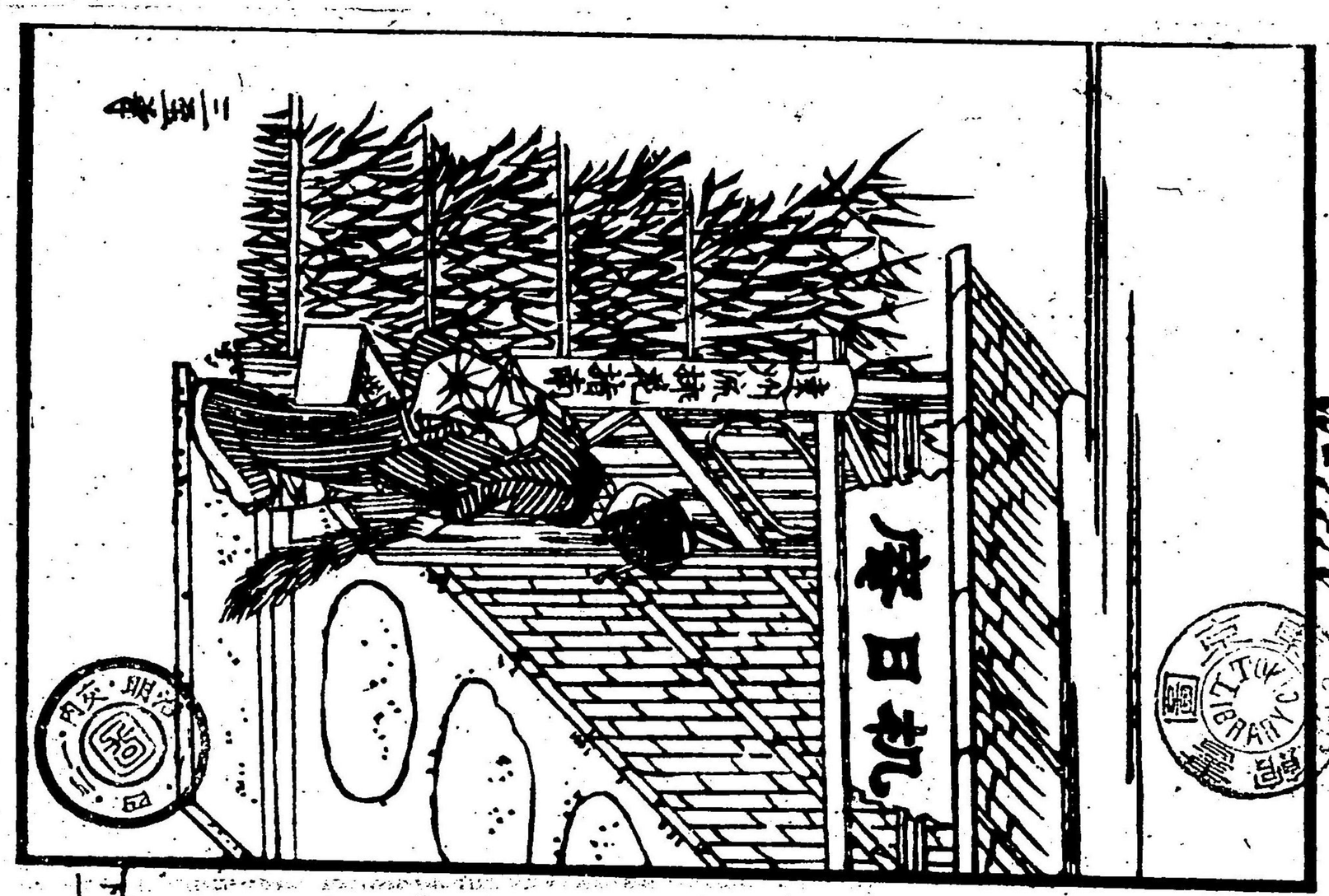
詩花名引

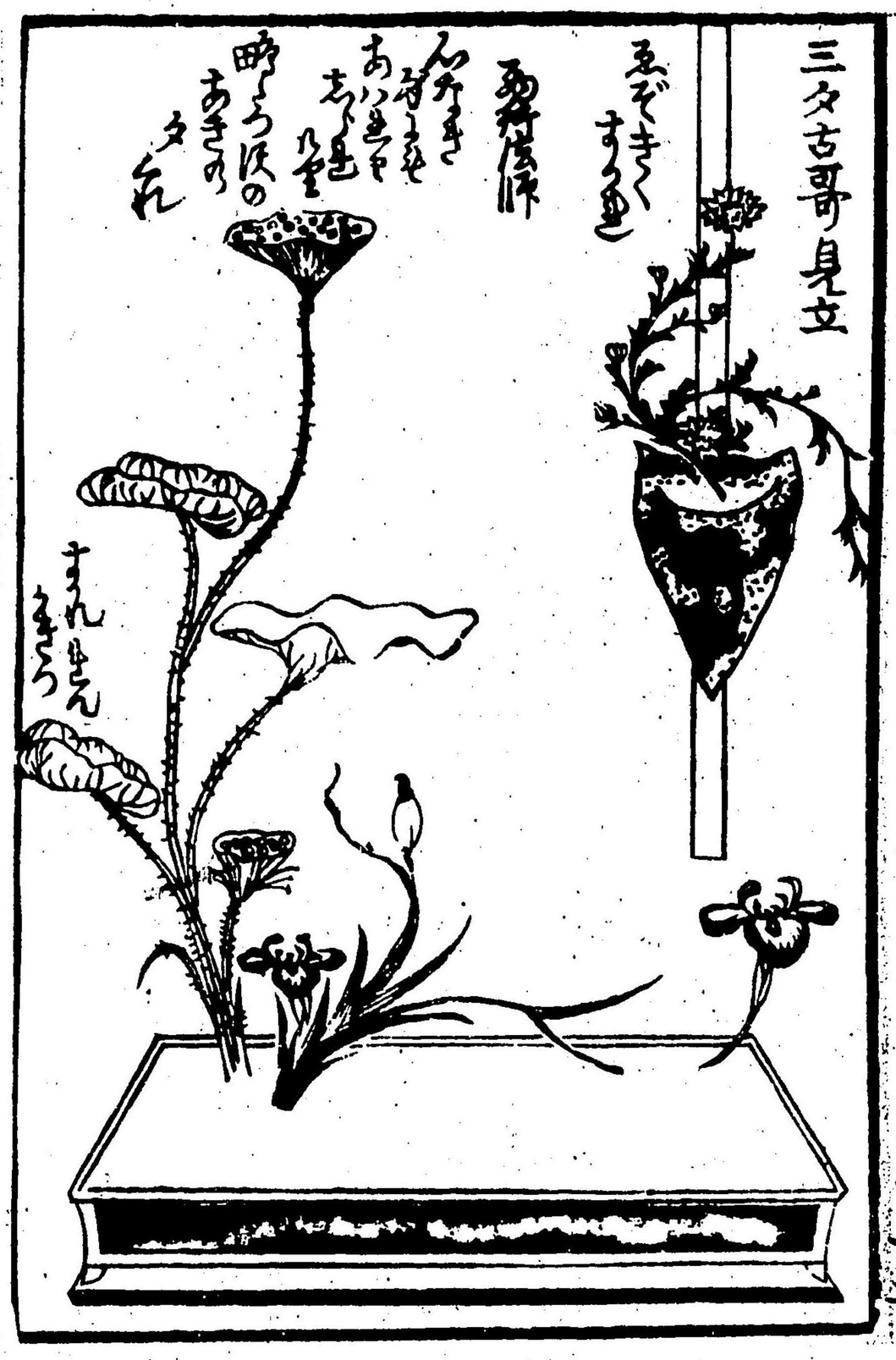
初日庵集

下

特41
794


八月朔日

華蓮法師
紅葉のもみぢ
かとひの


三夕古哥見立
舞法師
下二

東山殿
山椒井出の玉川
花の枝の玉川
井手の玉川

みちもり
野田の玉川
能因法師
みちのくの
千ちの
家甫々作

利休師三木之花ちり
てやうしてえんらく松と云
紀のくに野玉川
孔法
ひきれても波やたつたの
竜野くまの玉川
武野謂布の玉川
貞爽々
伊布やさくらの植樹の紅つゆ
つゆのきとゝまる玉川の里
尚有乗仏こりんのきくこゝろを
もてそさん今新名と改

東山ゆこ八水神と云とゝ
昔改て廣口の
おもうらえん

延石野路の玉川
後水尾々
あらしまこんのつの玉川
萩たるをゝく
ゆくるる波うり丹霜りる

宗甫云ハ去れの
色みどりを用ひるとも
松とうくとも秋の天
を仰ぐべし

清の玉搖衣玉川
右挿

松風の音さへ秋ハ
きよらきらきら
衣うつまる玉川の宮

挿分善悪の圖

山さくらとうくとう

華

草

本
草

草

草をみそなへ様

本

本

花葉陰陽の図

陽

陰

陽

陰

陽

陰

陽

陰

半陰半陽

半陽半陰

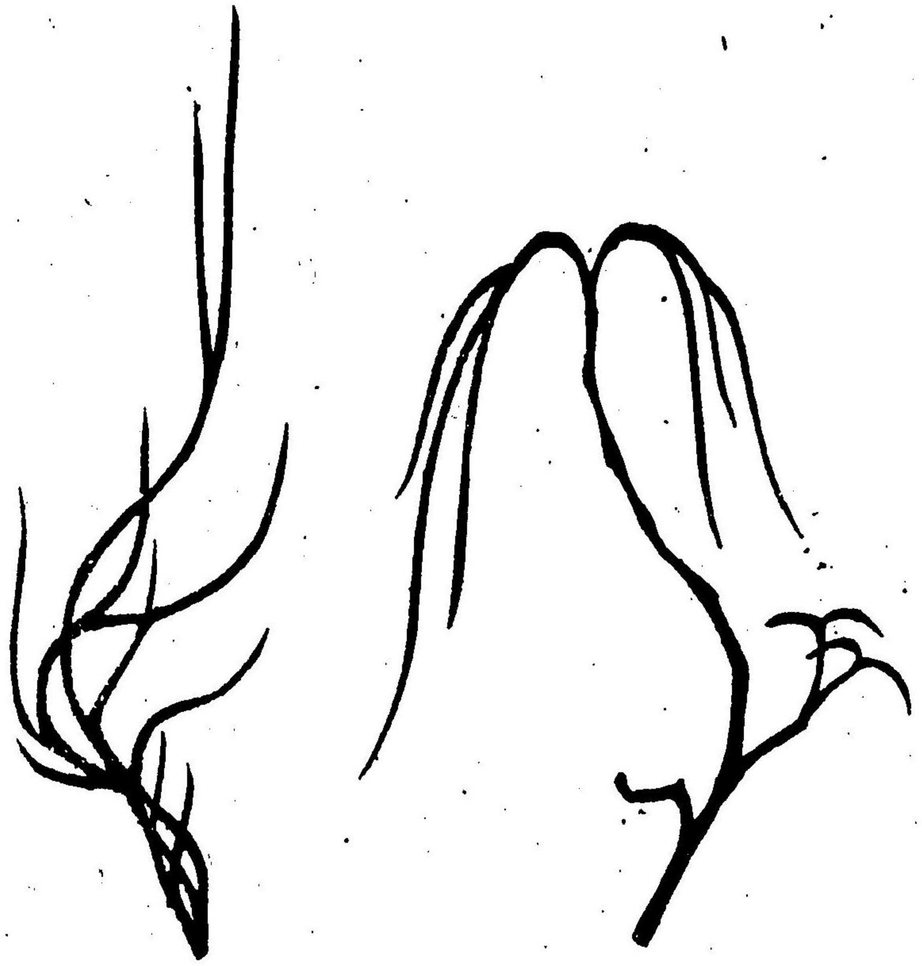
十文字切

三ちう

長横切

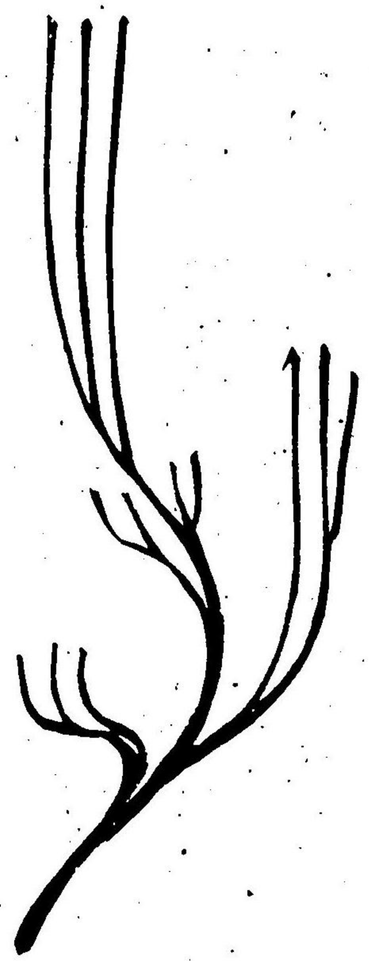
窓切

両垂（たれ）



叢垣（ひーがき）

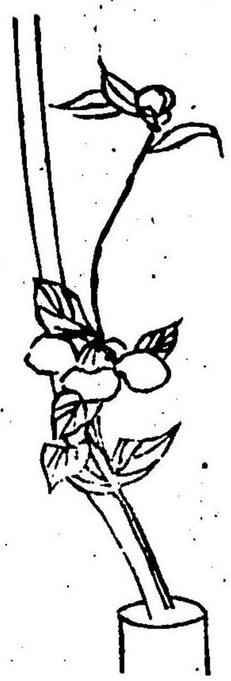
三真

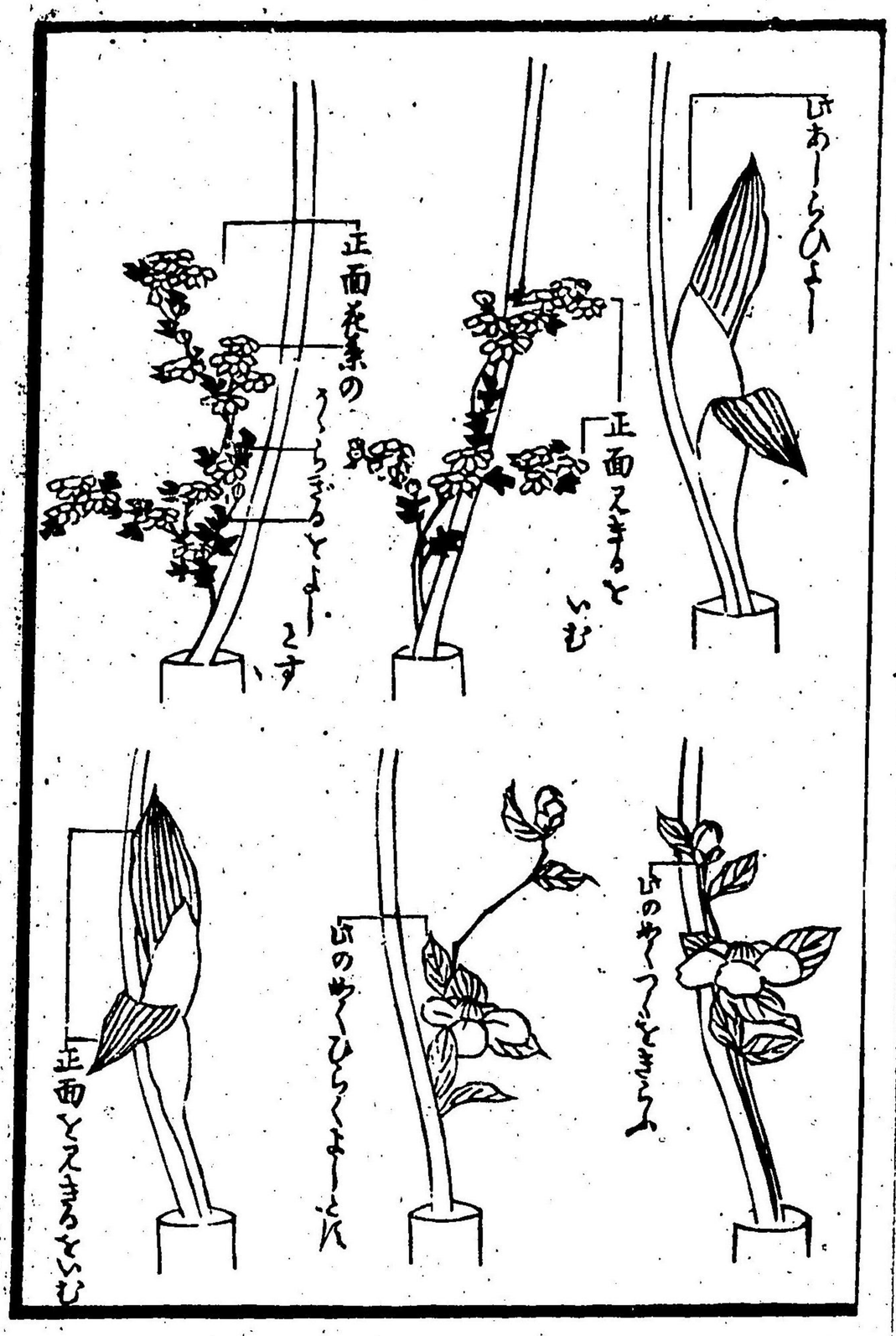


あーらひ活方の図

あーらひ初ふ傍る一本ハ
ふのこ〳〵根をうるべー

ふのこ〳〵花葉すべて三面を
かくすをきらふ





神傳仏諸法合解

神	仏	色	季	常	臓	味	四ジン	形
木ノ神	地空	青	春	仁	肝	ス	龍	⬭
火ノ神	蓮	赤	夏	礼	心	ニガシ	雀	△
土ノ神	經	黄	土用	信	脾	アマシ	虫	□
金ノ神	法風	白	秋	義	肺	カラシ	虎	◡
水ノ神	華	黒	冬	知	腎	シホ	亀	⬭

一瓶一根五枝五行配當畧傳

中央

南

北

東

西

前

花挿方作法の事

先花盆ふ花をのせて右の方ゟ置まゝ
水けきゝゟ布巾をのきまいり左の方ふ
置床の花器を共臺と共りかまちの際
まて出〳〵すこ〳〵下りて花器をおゆ〳〵
茎ゟり込挿入を水をけいく花器と共
の手ゟて花臺ふの せ挿除りて床の真
中ふをえをくべ〳〵

挿分善悪の事

挿分ハ山水をかゝとり又山と山水と
ゆまてもよ〳〵たとへば柳ゟかきつは
たの多くひいけ分ハ山水ありまゝ一
瓶の挿花ゟ木を高中へ挿両方より茎
を挿ゟ草ゝさみとて焼ふあり又草を
真中へ挿左右より木まて挿ゝ木をさ
ゝとて嬬ふまゝ花ものと花りのまて

業物をたさみても燒ふすなり前の圖
を見合すべし

花業陰陽の事

夫陰陽ハ互地自然の道理なして更ふ
離るこ事なし花のひらくハ陽なり蕚
ハ陰まこと陽ハ陰なりまひらきの花
ハ本陽なり蕚よりハ花ひらうんとする
有様ハ陰中の陽なり葉も又表ハ陽ふ

裏ハ陰なり前の圖を見て知るへし

燒ふ枝の事

十文字切とて枝こと枝ともて十文字ふ切
たるを燒ふなり
三切とて横より立へかくりあふをき
らふ
長鬚とてせいこらべこ焦るを燒ふ
窓切とて瘤形或ハ穴のたきたるをく

瓶の内何によりても嫌ふ事あり
両垂とて両方へわかれし様に垂るゝ枝
を嫌ふ何にも極まることに多し
菱垣とて左右より枝の入違ひになり
たるを嫌ふ
三真とて真なりける事なり何れの
枝にても三本同じ様に揃ふるを嫌ふ
何れも前の圖を見て知るべし此ほか

去りきらひの枝多しといへども先ツ
此の七種をよけて挿なり其木その事
の出生に従ふてさすべし

葉物組様の事

圖の如くかきつばたハ中ひくに組な
り前に一枚出生の葉をまふゆゑ何やかも
圖の通り法ふなりまたかきつばた
ハ等り事とも不別に一枚づゝ退葉と

つゝふ形り又夏い暑中いとひ葉として
真の退葉ともふ二枚ゝして挿すり四
季の挿うゝあり花菖蒲い菖のめく丹
言ふ細べし出生ハ葉いゝ〳〵れあやめ
い股〳〵よくゝむ有り行れも圖の如く中
より出る葉い特葉尤よ多し

流枝のす

流し枝い圖のことくあゝきれなり為

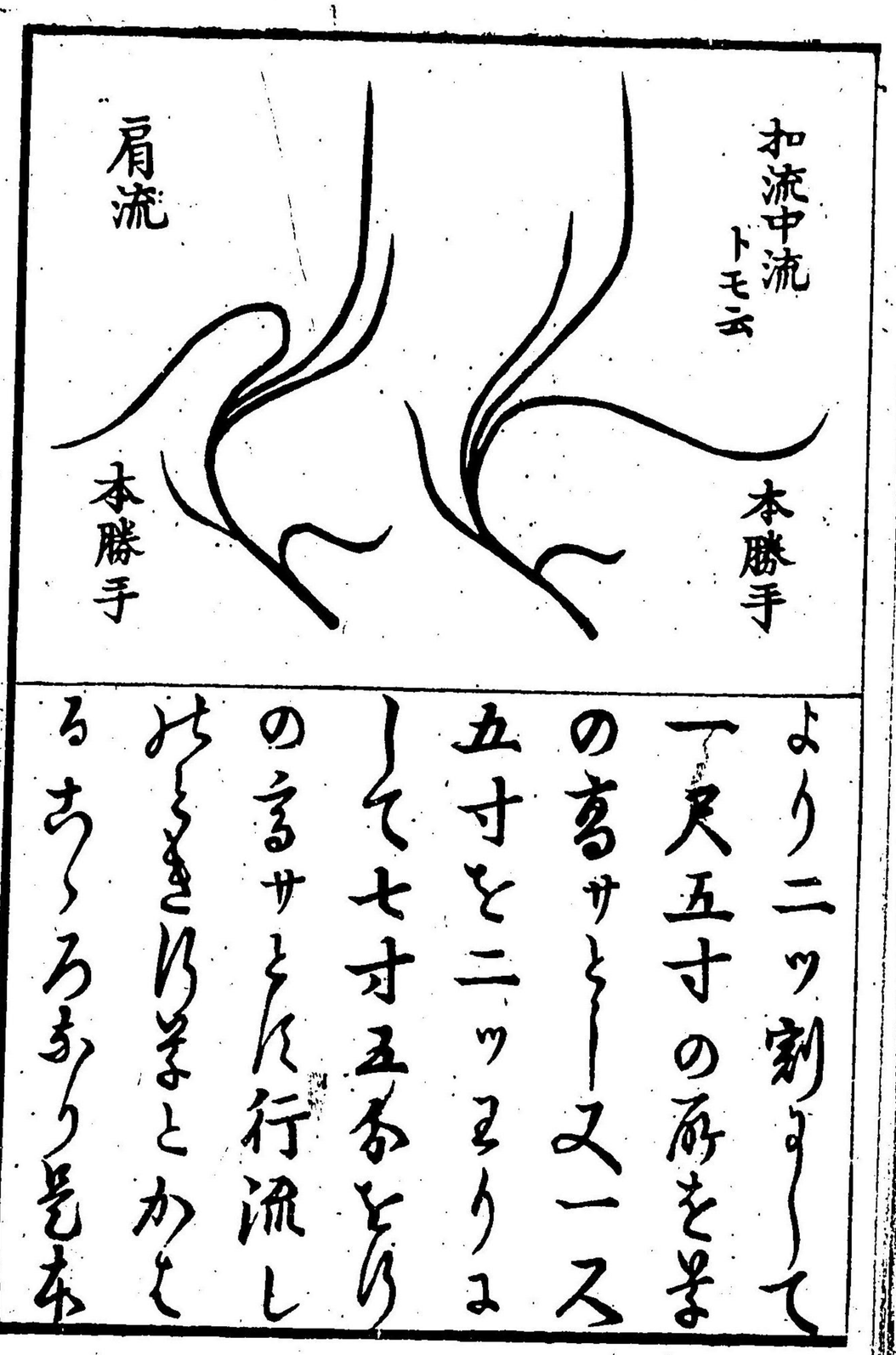
草流

逆勝手

行流

逆勝手

とへば茅流しふ挿
時い行と留まゝり
流しの附い草とみ
ドうく生るなり生
外圖のめく片ふが
しすて知るべし挿
芒法式い花の長サ
三尺有ときいふか



より二ッ割すして一尺五寸の所を長さの高サとし又一ス五寸を二ッ割りして七寸五分とり其の高サとし行流しはしきりまとかとる方ろ方り長本

式の挿かたあり心得て挿へし

挿花つぼ合の圖

一瓶の花を挿まハ圖のごとくにはり合肝要あり つぼ合あしけれハ見ぐるしく

見るべき物なり其心得すして挿へし

あしらひの花挿方口傳

あしらひの花いを勝手よりは（勝手トハ逆勝手ノ事ナリ）正面の左う右又い横う後より挿べし正面といい前より見る所すていかよも正面のあざやうなるを使とたとへ一花一葉すても正面へさすると手を挿ふ末べく正面よりひらきてあしらひ生へしたらひ初よ挿る一本い根と割て挿へし節ならさるときハ何本割てもよしあしらひの圖と見合せ工夫をべし

花の色陰陽のる

一赤　紫　紋　薄紅　陽なり

一青　黄　白　陰なり

をべて陰陽合躰の色を挿合にべし

かまどもせひおくゝ陽と陽陰と陰を生る時ハ菱方ともよ真行草をかたとり境をつけて花と花見合ぬ枝ハ二瓶のもゝゝろまて挿へし

水揚養物の事

一萩ハ石硫黄と水ハすていきのりをぬ
ふふ根本を徳利へ挿て煮へし
くるりつなり

一素吾ハ花器の中へ石灰を入れ水を
ほいで生べし又根本へ塩とけ焼
てもよし日向へ出生れりの尤保つ
なり

一水葵ハづゐを抜き山樹をせんぢさ
まし花器へほいて生けべし

一寒竹ハいゝつて養ひむつのしき物
まて切とり真ふ義のまくりのなり

先沙五合程より水を入れ釜にて煮た
て其中へ入れ薬の色かゝらぬ内に
引揚け生へしよく保つなり
此外に木蓼ひ根挿芯口傳尤多くさき
より發明する活芯字ひ学と又合せ能く
工夫をべし

明治廿一年三月廿五日印刷
同　年四月十四日出版　定價二十錢

著作者　東京府平民　唐澤久藏　本所區中之郷元町廿二番地

發行者　東京府平民　近藤清太郎　同區石原町廿三番地

印刷者　東京府士族　岩崎直保　同區松倉町二丁目五十七番地